

## 言語変化のメカニズム

これまでに提案されてきた様々な言語変化のモデルから、3つを紹介する。まず、Smithによる言語変化モデルである。Smithのモデルは、図1のように静的な言語体系の提案から出発し、それを図2のように動的にとらえなおすという2段階のモデルとして理解したい。

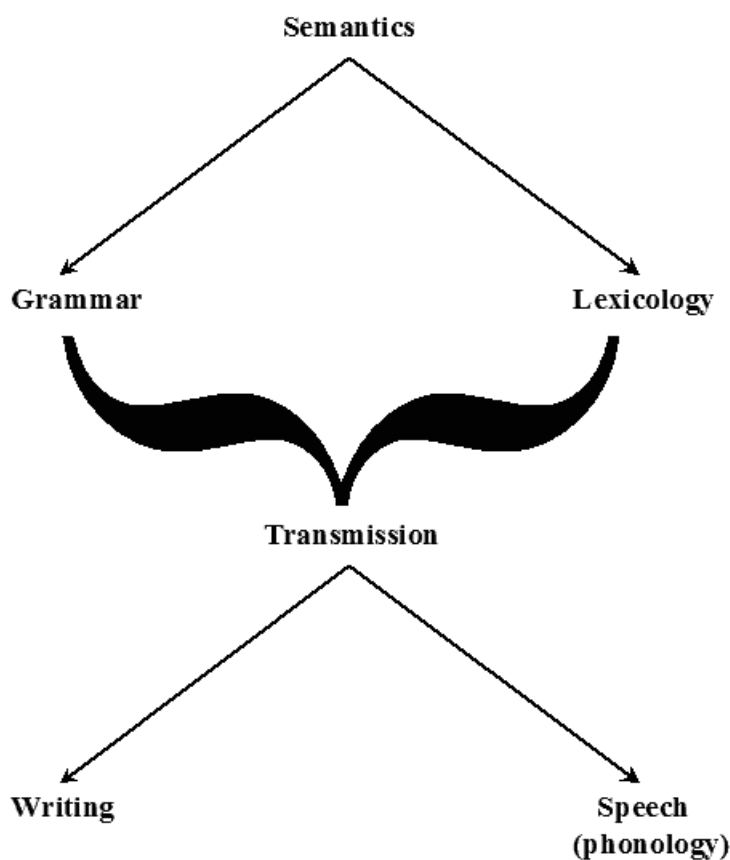


図1 Smithによる静的な言語体系モデル (Smith 4)

図1によると、言語の最も深いレベルに Semantics(意味)があり、次にそれが Grammar(文法)と Lexicology(語彙)によって表現され、次いでそれらが Transmission(伝達)の過程を経て、最後に Speech(話し言葉)あるいは Writing(書き言葉)という媒体により顕現する。ここで、Transmissionの配下で話し言葉と書き言葉が同列に置かれていることは注目すべきである。言語は文字ではなく音であるという伝統的な言語学の常識から逸脱し、文字を言語研究の場に引き戻そうとする意図が、このモデルには感じられる。

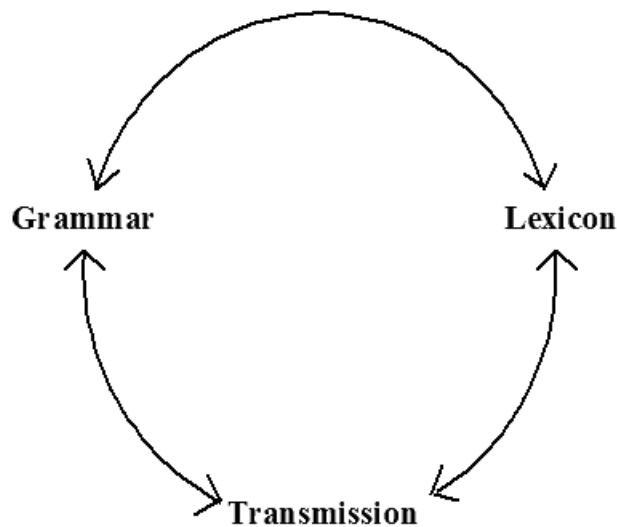


図2 Smithによる動的な言語変化モデル (Smith 5)

図1は、あくまで共時的で静的な言語体系のモデルである。言語変化という通時的で動的な過程を扱おうとするのであれば、この図をこのままの形で利用することはできない。Smithが発展させた図2は、図1の示す部門間の階層関係を考慮することなく、むしろ部門間の同等な関係と相互作用を重視した、言語変化の実態により近いモデルを表す。Grammar, Lexicon, Transmissionの3者ががっちりとスクラムを組んだ言語体系 (système où tout se tient) においては、ある一点で生じた変化が即時に体系内の別の部分にも影響を及ぼす可能性があることを、この動的なモデルは示している。

Smithは、上記のモデルを補完すべく言語変化の3機構、すなわち変異 (variation)、体系的調整 (systemic regulation)、接触 (contact) を提案している。変異は、体系内に共存する複数の変異項 (variants) が交替して実現されることである。各々の変異項の守備範囲は変異空間 (variational space) と呼ばれ、毎回の実現はその範囲内で微妙に差異を示す。体系的調整の作用は、各変異項の変異空間の範囲の広さを制限し、体系全体が機能し続けることを保障している。

しかし、言語は変異と体系的調整の機構のみで制御されうるほど単純なものではない。というのは、言語 (共同体) は真空には存在せず、周囲の言語 (共同体) との関わりのなかで存在しているからだ。あらゆる言語体系は、常に他の言語体系との接触によって組み替えを余儀なくされており、多かれ少なかれ不安定である。変異、体系的調整、接触の3機構は複雑な仕方で相互に関わり合っており、言語変化の諸条件を構成している。

言語変化についてもう一つの見取り図として、Samuelsのモデル (141) を紹介しよう

(図3を参照)

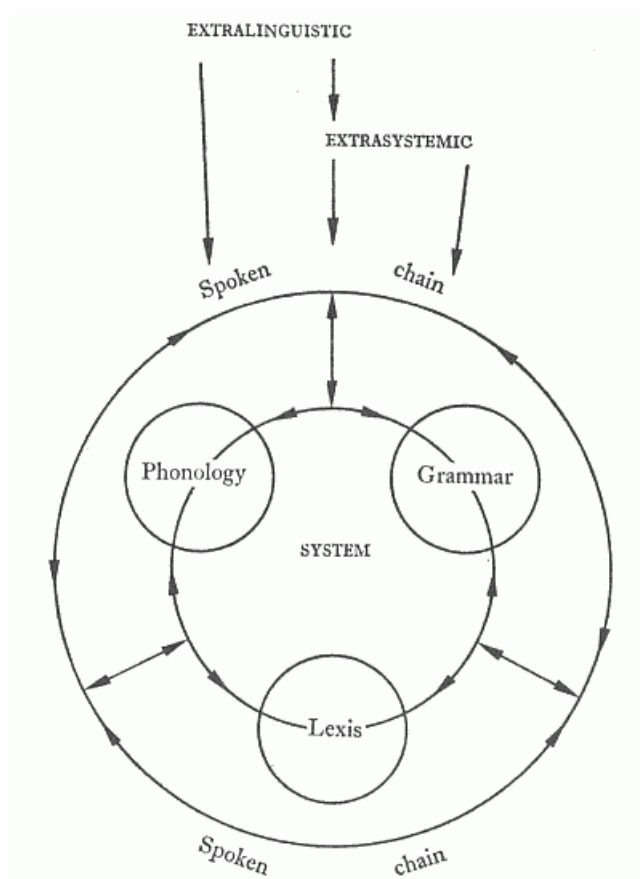


図3 Samuelsによる言語変化モデル (Samuels 141)

言語体系 (system) は、文法 (grammar)、音韻 (phonology)、語彙 (lexis) の3部門から成っており、それぞれは互いに強く結びついている。この体系は、3部門の堅いスクラムでがっちりと組まれてはいるものの、水も通さぬ密閉された容器というわけではない。体系は、それを基盤として現実に生み出される発話 (spoken chain) により、それ自身が常に変化にさらされている。発話はまた他の言語体系 (extrasystemic) との接触により圧力を受け、その圧力は間接的に文法、音韻、語彙へと伝わり、体系を変容させる力となる。さらに、文化や歴史のような種々の言語外的な (extralinguistic) な要因も、いっそう間接的にはあるが、体系に影響を及ぼす。

SmithのモデルもSamuelsのモデルも、本質的に動的でありエネルギーとしての言語の実態を捉えようとしているが、平面に図示されるために否応なく静的に見えてしまう。これらの図に時間の次元を加えるとすれば、図の面に対して垂直方向に伸びるチュー

ブのような図をイメージすることになるだろう。この立体的なチューブこそが、言語変化の軌跡を表すことになる。